

様式C-18

研究成果報告書

戦間期「洋行インテリ」の情報共同体
—インターネットを活用した情報政治学

課題番号 15530087

平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究成果報告書

平成19年5月

研究代表者 加藤 哲郎
一橋大学大学院社会学研究科教授
(katote@ff.iij4u.or.jp)

序	研究組織、交付金額、研究経過、研究発表	3
＜目次＞		
	はしがき－ベルリン反帝グループ関係者の群像（データベース）	9
	第一部 インターネットと情報政治	17
1	情報戦の政治学 グローバリゼーションの時代に	18
2	情報戦とインターネット・デモクラシー	37
3	現代日本社会における「平和」――越境する「非戦」	47
4	情報戦時代の世界平和運動	59
5	小泉劇場インターネット版の盛衰	68
	第二部 「洋行インテリ」の情報ネットワーク	75
	Personal Contacts in German-Japanese Cultural Relations during the 1920s and Early 1930s	76
1	ベルリン反帝グループと「三二年テーゼ」の流入	88
2	『伯林週報』発見記－鈴木東民から白井晟一へ継がれた日本語新聞	98
3	ナチス台頭を視た日本人画家－島崎藤助と竹久夢二の交点	116
4	勝野金政のラーゲリ体験と国崎定洞の肅清	135
5	社会民主党宣言から日本国憲法へ ――日本共産党三二年テーゼ、コミンテルン三二年テーゼ、米国OSS四二年テーゼ	151
6	「党創立記念日」の神話学	166
	第三部 戦争・占領・革命と情報戦	189
1	戦争と革命－ロシア、中国、ベトナムの革命と日本	190
2	体制変革と情報戦－社会民主党宣言から象徴天皇制まで	202
3	岡繁樹の一九三六年来日と荒畑寒村の「転向」－ゾルゲ事件の知られざる背景	219
4	情報戦としてのゾルゲ事件－反ファシズム連合と米国共産党日本人部	231
5	ノモンハン事件期のゾルゲ＝尾崎グループ－リュシコフ亡命とシロトキン証言	244
6	戦時米国の「天皇を平和の象徴とする」構想と東アジア	257
7	戦後天皇制をめぐる野坂参三、毛沢東、蒋介石の交錯	267
	第四部 情報戦時代の「帝国」と民衆	278
1	マルチチュードは国境を超えるか	279
2	グローバル情報戦時代の戦争と平和	287
3	グローバリゼーションは福祉国家の終焉か	295
4	インドで世界社会フォーラムを考える	304
5	日本の社会主義運動の現在	325
	あとがき	335

序

本冊子は、平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究課題 戦間期「洋行インテリ」の情報共同体－インターネットを活用した情報政治学

（課題番号 15530087、研究代表者 一橋大学大学院社会学研究科教授 加藤哲郎）

の研究成果報告書であり、研究組織は研究代表者のみの個人研究であるが、以下の交付決定額を得ての、4年間の資料収集・調査研究の成果である。

（研究代表者：加藤哲郎） 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 15年度	1,400,000	0	1,400,000
平成 16年度	800,000	0	800,000
平成 17年度	700,000	0	700,000
平成 18年度	800,000	0	800,000
総計	3,700,000	0	3,700,000

各年の研究経過及び研究発表は、以下の通りである。なお、これらの成果は、近く3冊の単行本に編まれて、出版される予定である。

<研究の経過>

第1年度である平成15年度は、1920-30年代における世界各地の在外日本人コミュニティにおける「洋行インテリ」のデータベース作りを目指したが、その中心であるドイツ・ベルリン及び米国カリフォルニアについては、ほぼ予定通りに重要人物についてのデータ収集と履歴入力を終えることができた。特に初めて取り組んだ米国については、現地調査を行い、ワシントンの米国国立公文書館、米国議会図書館資料、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校図書館の資料によって、これまでにない詳細なデータベースを作成することができた。

その過程で、新たな重要な知見も得ることができた。ベルリン日本人左派グループと共に「革命的アジア人協会」を構成していたインド独立運動家ヴィレンドラナート・チャットパディアの研究から、彼の1920年代ベルリンでの配偶者である米国人ジャーナリスト・アグネス・スメドレー関係の資料を米国及び中国・上海での日本人コミュニティ・データベースと重ね合わせ、従来から知られていたニューヨークの作家石垣綾子・画家石垣栄太郎夫妻とのつながりのみならず、30年代初頭にベルリン・アメリカの双方を往き来した作家藤森成吉、労働法学者野村平爾と石垣夫妻、さらにはベルリンからモスクワにいったん亡命した演出家佐野碩が1937年ソ連を国外追放になりニューヨークの石垣夫妻に助けを求めること、このネットワークにおける、父がモスクワの片山潜の親友であり、自身はベルリンで国崎定洞・勝本清一郎・藤森成吉らと共に「革命的アジア人協会」組織化の中心となり、兄伊藤道郎がロスアンジェルスにいた演出家千田是也の役割が判明した。

今年度調査の大きな副産物は、やはりスメドレー人脈の調査から広がった上海を中心としたゾルゲ事件の国際ネットワークの調査から、野坂参三が毛沢東・蒋介石と交わした未発表手紙4通を発見し、新聞でも大きく取り上げられたことである。

第2年度である平成16年度は、米国の日系移民史・日本人コミュニティ史に集中的に取り組んだ。デンバー大学及びワシントン国立公文書館・議会図書館の調査は、本研究の本来の目的であるコロラド州日本人コミュニティについて貴重な資料を得たほかに、思わぬ副産物をももたらした。一つは、1925-28年にデンバー大学留学中の日本人学生名簿のなかに、1930年に上海でリヒアルト・ゾルゲに尾崎秀実を紹介した謎の米国共産党員鬼頭銀一と、30年代に日本共産党野坂参三のアメリカからの対日工作を助手として助けるジョー小出（本名鶴飼宣道）の二人が、同級生として共に入っていることを発見した。野坂参三らの『国際通信』と、尾崎秀実らのゾルゲ事件が、人的ネットワークで重なり合ったのである。鬼頭銀一・ジョー小出の軌跡を追って、ご遺族にも連絡を取り、聞き取り調査を行った。そこで、ジョー小出が戦時中に日本人強制収容所から米国戦時情報局（OSS）の対日諜報宣伝（MO、ブラック・プロパガンダ）に加わったことを知り、米国国立公文書館のOSS資料を調査して、真珠湾攻撃直後の1942年春に米国心理戦共同委員会で「天皇を平和のシンボルとして利用する」日本プランが作成されていたことを発見した。「象徴天皇制」について、これまで知られていなかった米国側重要文書の発見で、邦字・英字新聞で大きく報じられた。それは、雑誌『世界』2004年12月号に発表され、近く単行本になる予定である。

第3年度である平成17年度は、中間的成果を、単著及びいくつかの論文のかたちで発表することができた。平成16年度のアメリカでの調査で、米国戦略情報局（OSS）の資料の中に、1942年6月に作成された「日本計画」という戦後日本構想を発見し、それが開戦半年のミッドウェイ海戦段階で早くも「天皇を平和の象徴として利用する」「皇居を爆撃しない」「日本人に戦後の自由と繁栄を保証する」等々の重要な内容を含んでいることを『象徴天皇制の起源 米国の心理戦「日本計画」』（平凡社新書）として発表した。

OSSは、戦後CIAの前身の米国初の本格的情報機関であったが、戦間期における米国・英国・ソ連・中国・日本の情報戦・情報政治のあり方を、全体として概観し比較することができた。

特に重要なのは、狭い意味での諜報活動よりも、米国OSS調査分析部（RA）で行われた社会科学・人文科学の戦争動員であった。経済学・政治学・社会学から民族学・心理学・美学にいたる延べ2000人もの学者を動員し、敵国日本・ドイツ・イタリアのみならず、アジア・アフリカ諸国についても各国の政治・経済・地理から国民性・習俗までを学際的に研究し、戦後のいわゆる地域研究の原型をつくっていた。戦後に著名になる学者たち、W・W・ロストウ、A・シュレジンジャーJr、W・レオンチェフ、S・ヒューズ、E・シルズ、H・マルクーゼ、F・ノイマン、P・スウィージー、J・K・ファアバンク、J・F・エンブリーらの戦争協力の証拠が署名・無署名で多数含まれていた。ほとんどが当時の機密文書で全面公開はようやく2001年であった。

その中核を成す「ドノヴァン長官文書」のマイクロフィルムが、日本では国会図書館にもなく、一橋大学図書館と早稲田大学政経研究所にのみ所蔵されていることも判明し、そこには本研究で言う日本人「洋行インテリ」を対日戦に利用した記録も入っていた。

最終年度である平成18年度は、1920-30年代「洋行インテリ」によって構成された「情報共同体」の特質を、彼らの戦前・戦中・戦後の軌跡をデータベース化し整理することで、まとめあげ総括した。

そのうち

(1) ワイマール末期からナチス期にドイツに滞在した有澤広巳・国崎定洞・千田是也・勝本清一郎ら日本人知識人・文化人については、研究代表者が主宰するインターネット上のホームページ「ネチズンカレッジ」内に「1930年代在独日本人反帝グループ参加者・関係者一覧」の特別ページを設け、2006年9月15日現在の最新データを約100人分掲載して、社会的にも公開した。同時に、英文及び和文で論文・著書を執筆し、一部はすでに公刊された。

(2) 1920-30年代に旧ソ連に滞在した日本人については、すでに、戦後日本共産党指導者野坂参三と片山潜長女安子を除くほとんどが、いわゆるスターリン粛清により銃殺・強制収容所送り・国外追放になっていたことを研究代表者は明らかにしてきたが、本年度のロシア現地調査を含む本研究の成果にもとづき、2007年1月1日現在の最新データ約100人分を、「旧ソ連日本人粛清犠牲者・候補者一覧」として特設ウェブページに公開した。この作成過程は、2006年8月19日付『朝日新聞』でも報じられた。

研究期間中の成果を総括する過程で見いだしたものは、当初、丸山真男が敗戦直後の日本人「インテリ」の特質として特徴づけた「悔恨共同体」との対比で、「情報共同体」と想定してフィールドワークと事例研究を重ねてきた「洋行インテリ」のつながりが、「共同体」というより「ネットワーク」と特徴づけた方が適切な、地理的広がり多様性を持っていたことである。戦間期の「情報共同体」は、戦後「悔恨共同体」へと向かわず、「情報ネットワーク」により結ばれた、今日のグローバル社会を先取りする現代的性格を有していた。

<研究発表>

研究発表1（平成15年度の研究成果）

〔雑誌論文〕

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「9.11以後の情報戦とインターネット・デモクラシー」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
公共哲学ネットワーク編『地球的平和の公共哲学』	東大出版会	2 0 0 3	230 250

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「情報戦時代の世界平和運動」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
『世界』6月緊急増刊号	臨時増刊	2 0 0 3	128 130

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「情報戦時代の『帝国』アメリカ包囲網」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
『葦牙』	29号	2 0 0 3	142 170

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「グローバル化は福祉国家の終焉か」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
『一橋論叢』	130巻4号	2 0 0 3	16 32

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「グローバル情報戦時代の戦争と平和」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
日本平和学会『世界政府の展望（平和研究）』	28号	2 0 0 3	86 105

著者名	論文標題		
加藤哲郎	「20世紀日本の社会主義と第一次共産党」		
雑誌名	巻・号	発行年	ページ
『社会主義』	496号	2 0 0 4	53 70

〔図書〕

著者名	出版者	
加藤哲郎（田崎宣義と共著）	国立市議会	
書名	発行年	総ページ数
『国立議会史』記述編	2 0 0 3	429ページ

研究発表2（平成16年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（6）件

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
加藤哲郎	初公開「野坂参三・毛沢東・蒋介石」往復書簡	文藝春秋	6月号	2004	342-349

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
加藤哲郎	反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の1936年来日と偽装転向	インテリジェンス	4号	2004	72-85

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
加藤哲郎	大義の摩滅した戦争、平和の道徳的攻勢——『アブグレイブの拷問』をめぐる情報戦	世界	7月号	2004	85-94

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
加藤哲郎	新史料発見 1942年6月米国『日本プラン』と象徴天皇制	世界	12月号	2004	133-143

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
加藤哲郎	グローバルな世界と<私たち>の従軍	『従軍のポリティクス』（青弓社）		2004	9-36

著者名	論文標題	雑誌名	巻・号	発行年	ページ
KATO, Tetsuro	Japanese Political Economy in Restructuring: Lessons for Indian Development	Sushila Narsimhan & G. Balatchandirane eds., <i>INDIA AND EAST ASIA: LEARNING FROM EACH OTHER</i> , Delhi		2004	229-262

〔図書〕 計（1）件

著者名	出版者	書名	発行年	総ページ数
加藤哲郎・国場幸太郎編・解説	不二出版	『戦後初期沖縄解放運動資料集』第2巻	2004	1-344

研究発表3（平成17年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（6）件

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	イラク戦争から見たゾルゲ事件			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
日露歴史研究センター講演録『現代の情報戦とゾルゲ事件』			2005	15-33頁

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	21世紀に日韓現代史を考える若干の問題——1942年の米国OSSから2004年の東アジアOSSへ			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
『第7回日韓歴史共同研究シンポジウム報告』			2005	67-80頁

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	社会民主党宣言から日本国憲法へ——日本共産党22年テーゼ、コミンテルン32年テーゼ、米国OSS42年テーゼ			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
『葦牙』		31号	2005	19-42頁

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	グローバリゼーションと情報			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
『聖学院大学総合研究所紀要』		33号	2005	80-144頁

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	ヴィクトーリア手記の教えるもの			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
『山本正美治安維持法裁判陳述集』解説（新泉社）			2005	483-491頁

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	護憲・論憲・改憲の幅と収縮可能性			
雑誌名		巻・号	発行年	ページ
『法と民主主義』		405号	2006	12-15頁

〔図書〕 計（1）件

著者名	出版社		
加藤 哲郎	平凡社		
書名		発行年	総ページ数
象徴天皇制の起源 アメリカの心理戦「日本計画」		2005	1-246頁

研究発表4（平成18年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（ 6 ）件

著者名	論文標題			
Tetsuro KATO	Personal Contacts in German-Japanese Cultural Relations during the 1920s and Early 1930s			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
Christian W. Spang, Rolf-Harald Wippich eds., "Japanese-German Relations, 1895-1945 War, Diplomacy and Public Opinion", Routledge, London,		2006	pp.119-138	

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	戦争と革命—ロシア、中国、ベトナムの革命と日本			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第8巻『20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店		2006	31-58頁	

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	体制変革と情報戦—社会民主党宣言から象徴天皇制まで			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
岩波講座『「帝国」日本の学知』第4巻『メディアのなかの「帝国」』岩波書店		2006	105-143頁	

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	国家権力と情報戦—『党創立記念日』の神話学			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
情況	7巻3号	2006	70-86頁	

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	国際情報戦のなかのゾルゲ=尾崎秀実グループ			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
労働運動研究	復刊14号	2006	71-87頁	

著者名	論文標題			
加藤 哲郎	グローバリゼーションと国民国家			
雑誌名	巻・号	発行年	ページ	
社会理論研究	7号	2006	10-29頁	

〔図書〕 計（ 1 ）件

著者名	出版社		
加藤哲郎・伊藤晃・井上學編著	白順社、東京		
書名	発行年	総ページ数	
社会運動の昭和史—語られざる深層	2006	1-412頁	

はしがき ーベルリン反帝グループ関係者の群像

一橋大学の政治学講義で、学生にレポートを書かせた。「民主主義から連想する言葉」を概念的に説明する課題で、多い答えは予想通り、この二〇年以上大きく変わらず、1 選挙、2 自由、3 多数決、4 議会、5 平等、の順だった。

驚いたのは、学生たちが挙げた参考文献・典拠の方である。かつてなら、広辞苑か、政治学の教科書・辞事典や岩波新書がよく挙げられた。ところが今年度の学生の七割は、インターネット上のフリー百科辞典「ウィキペディア(Wikipedia)」を挙げた。

グーグル(Google)に言葉を打ち込んで上位のいくつかをざっと読み、ウィキペディアから適当な箇所をペーストしてレポートするのが、イマドキの学生の定番らしい。知の修得の仕方は、確実に変化しつつある。

日本のインターネットは、携帯電話と結びつき、凶悪犯罪や自殺にも使われる。そんな状況を「バーチャルな仮想空間」「疑似環境」だからと、見過ごすことはできない。

英語の「バーチャル」には「実質上の」という意味もある。バーチャルは「もう一つの現実」と考えるべきである。

ウォルター・リップマンが、名著『世論』(一九二二年)で、メディアによって構成される「疑似環境」を述べたのも、それが「疑似」だから無視せよというのではなく、「ステレオタイプ」や「世論」を通じて実際の「環境」の一部になり、偏見や差別をもたらす問題を警告したのだった。

「疑似環境」「もう一つの現実」を生き抜くには、野村一夫氏の提唱する「インフォアーツ」が必要になる。高校情報科などで情報教育の陥りがちな「インフォテック=情報技術・情報工学」に対抗する、「ネットワーク時代に対応した知恵とわざ」で、「リベラルアーツ=自律的市民に必要な教養」の二一世紀ヴァージョンである。私が個人ホームページ「ネチズンカレッジ」(<http://www.ff.iiij4u.or.jp/~katote/Home.shtml>)で主張してきた「ネチズンシップ」「ネチケット」よりも広い。

野村氏は、1 メディア・リテラシー、2 情報調査能力、3 コミュニケーション能力(ネチケット)、4 市民的能動性(ネチズンシップ)、5 情報システム駆使能力、6 セキュリティ管理能力を、「インフォアーツ」として挙げる(『インフォアーツ論』洋泉社新書、二〇〇三年)。私はこれに、7 異文化理解・交信能力、8 グローバル・ネットワーク組織能力、をも加えて使っている。

要するに、学校・大学でも、家庭・職場でも、情報メディアの人文社会科学的教養が必要で、それなしでは「グーグル型民主主義」「グローバル・シチズンシップ」はおぼつかない。地球市民社会への道は、その先に拓ける。

インターネットの普及によって、政治の世界も変わりつつある、行政情報の入手も、市民運動のつながりも、ずいぶん便利になった。たいていの情報はウェブ上で手に入り、世界のNGO・NPOとも国境を超えて瞬時につながる。

アメリカ大統領選挙では選挙キャンペーンの主役になり、韓国では汚職・腐敗候補を排除する落選運動で使われ、市民参加の新聞オーマイニュースが威力を発揮した。

日本ではなお試行段階だが、やがて選挙での電子投票も日程にのぼるだろう。インターネットの双方向性・脱国家性を生かすことができれば、デモクラシーの範囲と深度は、飛躍的に拡張できる。

だが、IT技術がそれ自体として分権化をうながし、ネットワーク型コミュニケーションをもたらすというのは、幻想である。むしろ、インテル=マイクロソフトのIC・OS支配、英語のグローバル・リテラシー化、アメリカ国防総省エシユロンによる世界の電波情報の盗聴システム化のように、もしも市民による活用と抵抗がないならば、地球的規模での独占・集権化も可能である。ジョージ・オーウェルが『一九八四年』で描いた悪夢、全体主義・管理社会のディストピアにも通じる。

つまり、インターネットや携帯電話のような個人単位のコミュニケーション手段が広がることで、一方でさまざまな個性のネットワーク型結合が可能になると同時に、他方でその大元を押さえ、個人情報や私的コミュニケーションまで集権的に管理し支配しようとする動きも現れる。

地球的規模では、日本でも地域間・世代間では、デジタル・ディヴァイドとよばれるIT技術のインフラ格差・普及活用格差が、深刻な問題をつくりだす。インターネットは、紛争とそれを解決する政治の終焉をもたらすどころか、新たな紛争、新たな政治のアリーナをつくりだす。現実社会に格差や差別や犯罪がある限りで、「擬似環境」「もう一つの現実」は、それを単純化し、増幅し、激化することにもつながる。

日本の政府や地方自治体は、まだこうした二一世紀的問題に、本格的に取り組みえていないように見える。首相官邸、各省庁、東京都庁や市町村のホームページをみても、定型的行政情報と窓口・施設案内がほとんどで、住民から意見を汲み上げ、日常的に応答していく姿勢は乏しい。選挙期間中は、未だにホームページの更新さえ許されない。

筆者の個人ウェブサイト「加藤哲郎のネチズンカレッジ」は、累計百万件近いアクセスを記録しているが、地方自治体のホームページには、せいぜい市町村の人口程度というところもある。かつての松戸市「すぐやる課」のような住民との結合は、インターネット時代にこそふさわしいのだが、その分権的ネットワークを生かすためには、市民と政府・行政の実践的努力が不可欠である。

こうした問題意識により行われた、平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究課題 「洋行インテリ」の情報共同体—インターネットを活用した情報政治学

（課題番号 15530087、研究代表者 一橋大学大学院社会学研究科教授 加藤哲郎）の研究成果を総飼う的に集大成したものは、以下に掲げる「洋行インテリ／ネットワーク」の群像である。

ベルリン反帝グループ関係者の群像（データベース）

情報ネットワークの縁・閥・派、運動人脈

本研究で直接の課題とした『洋行インテリ』については、その典型としての1920-30年代在独日本人の「ベルリン反帝グループ」について、以下のようなデータベースを作成した。このグループについては、私は既に評伝『人間 国崎定洞』等で詳述し、詳しい構成員リストとデータベースを公開してある。インターネット上では、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に、「一九三〇年代在独日本人反帝グループ参加者・関係者一覧」を設け、逐次更新している(<http://www.ff.iiij4u.or.jp/~katote/Berlin.html>)。

関係者は、おおむね二段階、五つのグループに分けられる。そのネットワークのもととなるのは、関係者の織りなすパーソナルな縁・閥・派、運動の人脈である。

これらの人々は、ベルリン社会科学研究会の時代はもとより、実践活動に入って反帝グループに変身した後も、必ずしもマルクス主義や共産主義の信念のみでつながっているわけではなかった。血縁・地縁、旧制高校・帝大の同窓・先輩後輩関係、日本での職業的・学会的つながり、東大新人会や京大河上肇ゼミなどの人脈、それに渡欧時の船旅やシベリア鉄道での同行などの偶然も作用した、「洋行インテリ」のネットワークだった。

たとえば、渡航以前からのつながりとして、次のようなものがある。

一 血縁・地縁関係（東大法蟬山政道と京大農山田勝次郎は実兄弟、ベルリンの千田是也はロスアンジェルスの実兄伊藤道郎を通してアメリカ西海岸と、島崎蒞助はパリの実兄鶏二を通じてパリの日本人左翼グループと連絡、電通の鈴木東民と川村金一郎は岩手出身の同郷）、

二 旧制高校・大学等の学歴（鈴木東民と有澤廣巳は旧制二高同窓、蟬山政道・松山貞雄・菊池勇夫等は東大法学部同窓）、

三 職場・学会・社会運動のつながり（東大新人会関係者、京大河上肇ゼミ出身者と東京商大福田徳三ゼミ出身者、藤森成吉・勝本清一郎らのプロレタリア文学運動、千田是也・佐野碩・土方与志の労働者演劇運動）、
渡航理由・渡航途上のつながりも、人的ネットワークになる。

四 文部省在外研究員同期、

インド洋回り渡航船やシベリア鉄道で一緒（東大有澤廣巳と京大谷口吉彦、高松高商堀江邑一らと蟬山政道夫人の渡航）、

五 血縁・地縁・学歴の縁を頼った渡航（河上肇高弟小林輝次の甥小林陽之助の京大関係者を手づるにした渡航、有澤廣巳の紹介による小林義雄・喜多村浩らの渡航等）、

六 文化運動・政治運動を目的とした渡航（千田是也のもとへの村山知義義弟岡内順三や島崎藤村三男蒞助・勝本清一郎・藤森成吉・山口文象らの渡航）、

また、渡航後、海外滞在中に、別な濃密なネットワークが広がる。

七 ベルリン大学付属外国人向けドイツ語学校への入学とクラス（島崎蒞助は四コース一年も通って井上角太

郎らをグループに引き入れた)、

八 留学受入機関、所属大学でのつながり、

九 日本大使館・伯林日本人会・日独協会等フォーマルなつながり、

一〇 下宿先・愛用日本料理店、欧州旅行・観光などでのインフォーマルなつながり、

一一 それぞれの交友関係のロンドン・パリ・ローマ・モスクワ・ニューヨーク、ロスアンジェルスなど在外日本人との人脈的つながり、など。

以下、これらに留意して、氏名(生没年)、滞独(欧)期間、渡航時職業、学歴・渡航後及び戦後の軌跡(留学時代についての著作・自伝・評伝等)をリストアップしておく。

ベルリン社会科学研究会

第一のネットワークは、もともと一九二六年秋の蠟山政道来独をきっかけに始まる、有澤廣巳・堀江邑一・国崎定洞・千田是也・鈴木東民・山田勝次郎・土屋喬雄・平野義太郎・蜷川虎三らが加わった「ベルリン社会科学研究会」の参加者ないし関係者である。ブハーリン、スターリン、レーニン。ヴァルガなどマルクス主義文献をテキストにした読書会兼親睦会で、ベルリン反帝グループの前身になる。蠟山が設立提唱者で、有澤・国崎が実質的中心であった。一九三〇年代の講座派(平野・山田ら)も労農派(有澤・土屋ら)も、両派をおしつづした体制派(国民精神文化研究所の経済学担当・思想善導係になる山本勝市、柔道赤化防止運動の工藤一三ら)も、一緒にマルクス主義を学んでいたことが興味深い。

蠟山 政道 (一八九五—一九八〇) 二五年一月—二七年八月英独留学、当時東大法助教授(政治学)、旧制一高・東大卒、新人会出身、二八年教授、三九年平賀肅学辞任、昭和研究会、戦後東大復学、五四年御茶の水女子大学学長、六八年東京都教育長(『無産政党論』日本評論社、三〇年、『追想の蠟山政道』非売品、八二年)

有澤 広巳 (一八九六—一九八八) 二六年四月—二八年五月在独、当時東大経助教授(統計学)、旧制二高・東大卒、三八年検挙、四五—五六年東大教授、五九—六二年法大学長、八〇—八六年日本学士院長(『有澤廣巳の昭和史』全三巻、東京大学出版会、八九年、『ワイマール共和国物語』上下、東京大学出版会、九四年)

国崎 定洞 (一八九四—一九三七) 二六年一〇月—三二年九月在独、当時東大医助教授(社会衛生学)、旧制一高・東大卒、二九年五月免官、三二年九月モスクワ亡命、三三年クートベ、三七年八月四日逮捕、一二月一〇銃殺(川上武・加藤哲郎『人間 国崎定洞』勁草書房、九五年)

堀江 邑一 (一八九六—一九九一) 二六年九月—二八年九月在独、当時高松高商教授、京大卒・河上肇ゼミ、三四年検挙、昭和研究会書記・尾崎秀実親友、四〇年満鉄調査部・検挙、四五年日本共産党入党、五七年日ソ協会会長(「国崎定洞の憶い出」『文化評論』七五年一—月号、『堀江邑一先生を偲ぶ』日本ユーラシア協会、九三年)

谷口 吉彦 (一八九一—一九五六) 二六年一〇月—二八年五月在独、当時京大経助教授、京大卒、三三年京大教授(国際経済)、四〇年経済学部長、四六—五一年公職追放・貿易商、五三年大阪市大教授、五五年香川大学長(『東亜総合体の原理』日本評論社、四〇年、『大東亜経済の理論』千倉書房、四二年)

山本 勝市 (一八九六—一九八六) 二五年三月—二七年九月仏独米留学、当時和歌高商教授、京大卒、三一—三二年再渡独、三二年文部省国民精神研究所、四六年自民党代議士当選五回(『マルクシズムを中心として』思想研究会、三〇年、『計画経済の根本問題』理想社、三九年、『思い出の記』東京山本会、六三年)

舟橋 諄一 (一九〇〇—一九九六) 二六年一二月—二九五月年在独米、当時九大文副手(民法)、東大法卒、三〇年九大教授、四九年法学部長、六四年九大名誉教授、法政大・創価大教授(徳本鎮「故舟橋諄一先生を偲んで」『ジュリスト』九七年二月一—五日)

菊池 勇夫 (一八九八—一九七五) 二六—二八年在独、当時九大法副手(労働法)、東大法卒、二八年九大助教授、二九年同教授、四九—五三年九大学長(芹沢光治良「長い旅路の伴侶」『こころの広場』新潮社、七七年)

山田勝次郎 (一八九七—一九八二年) 二六—二八年在英独(とく夫人同行)、当時京大農助教授、東大卒、三一年検挙、プロレタリア科学研究所、ソヴェート友の会、講座派、戦後共産党入党・六四年除名、高崎で実業家(蠟山政道実弟、『米と繭の経済構造』岩波書店、四二年、小山長四郎『風灯』限定版、七二年)

松山 貞夫 (一八九五?—一九六八) 二六—二八年在独、当時福島高商教授、福井県出身、東大法卒(我妻栄同期)、三三年全協事件で検挙・免職、岩波『法律学小事典』編集、三八年満鉄調査部、戦後四八—六七年法務省法務図書館長(井村哲郎編『満鉄調査部』アジア経済研究所、九六年)

岡上 守道（一八九〇—一九四三、別名黒田礼二）二〇年六月—三二年八月在独、当時朝日新聞特派員、旧制一高・東大卒、新人会出身、大阪朝日露独特派員、三四—三六年再訪後『日独旬刊』（『廢帝前後』中央公論社、三一年）

鈴木 東民（一八九五—一九七九）二六年八月—三四年三月在独、当時電通特派員・『伯林週報』発行、旧制二高・東大卒、三五年読売新聞入社、四四年検挙、四五年読売争議委員長、五五—六七年釜石市長（『ナチスの国を見る』福田書房、三四年、鎌田慧『反骨』講談社、八九年）

横田喜三郎（一八九六—一九九三）二六年一月—二八年一〇月在独、当時東大法助教授（国際法）、東大法卒、三〇—五七年東大教授・四八年法学部長、六〇—六六年最高裁判所長官、八一年文化勲章（『私の一生』東京新聞社、七六年、竹中佳彦『日本政治史の中の知識人』木鐸社、九五年）

黒田 覚（一九〇〇—一九九〇）二六年四月—三〇年四月在独英仏、京大法卒、三三年滝川事件で立命館へ、三五年京大教授（憲法）、四六年公職追放、五三年都立大・六三年専修大・六五年神奈川大教授（『国防国家の理論』弘文堂、四一年）

八木芳之助（一八九五—一九四四）二七年二月—二九年七月在独、当時京大経助教授（農業経済学）、京大経卒、三四—四四年京大教授、四一—四三年京大経済学部長

岡内 順三（一九〇七—一九五三、別名白髭渡）二七年三月—三三年二月在独、当時音楽・労働者スポーツ研究、高松中卒、三三年帰国検挙（村山知義義弟、「岡内順三調書」三三年）

土屋 喬雄（一八九六—一九八八）二七年四月—二九年七月在独、当時東大経助教授（経済史、労農派）、東大経卒、三九—五七年東大教授、六五年朝日文化賞、明大・駒大教授（日経『私の履歴書・三〇』六七年）

千田 是也（一九〇四—一九四四、本名伊藤園夫）二七年五月—三一年一月在独、当時俳優・演劇研究、早大中退・築地小劇場俳優、三三—三五年検挙・獄中、三六年新築地劇団、四四年俳優座創設・代表、新劇団協議会代表（『傍白』早川書房、五三年、『もうひとつの新劇史』筑摩書房、七五年、藤田富士男『劇白 千田是也』オリジン、九五年）

与謝野 譲（一九〇三—三九）二七年八月以降在独、当時日労党系ジャーナリスト・『伯林週報』営業、旧制一高・東大卒、新人会出身、三〇年代は「反帝グループ」に加わらず、「中管商店」を手伝い後「よさの商会」を興した（与謝野寛の弟修の結婚前の子で一時寛・晶子三男として入籍、外交官与謝野秀は従兄、石田英一郎・中野重治・石堂清倫同級、和田博文他『言語都市・ベルリン』藤原書店、〇六年）

平野義太郎（一八九七—一九八〇）二七年一二月—二九年一月フランクフルト大留学、当時東大法助教授（民法）、旧制一高・東大卒、三〇年共産党シンパ事件罷免、日本資本主義発達史講座編集、三六年逮捕、五〇年日本平和委員会会長（『日本資本主義社会の機構』岩波書店、三四年、『民族政治学の理論』日本評論社、四三年、広田重道『稿本 平野義太郎評伝』七四年、『平野義太郎 人と学問』大月書店、八一年）

蜷川 虎三（一八九七—一九八一）二八年四月—三〇年三月在独、当時京大経助教授（統計学）、京大経卒、三九年京大教授・四五年経済学部長、四八年中小企業庁長官、五〇—七八年京都府知事（『洛陽に吼ゆ 蜷川虎三回想録』朝日新聞社、七九年、細野他『蜷川虎三の生涯』三省堂、八二年）

高野岩三郎（一八七一—一九四九）二六年一〇月—二七年九月ミュンヘン滞在、当時大原社研所長、東大卒、一九〇三—一九年東大教授、二八年日本大衆党、四六年NHK会長（大島清『高野岩三郎伝』岩波書店、六八年、『大原社会問題研究所五十年史』法大出版局、七一年）

工藤 一三（一八九八—一九七〇）二六年—二九年ベルリン体育大留学、当時浦和高助教授・柔道家、佐賀高・東京高師卒、国土館教授、四一年厚生省体育官、戦後警察大教授・警視庁柔道指南

勝野 金政（一九〇一—八四、別名林）二八年二—三月訪独、当時パリ大学追放でベルリン経由モスクワへ、早大卒、同郷島崎藤村の勧めで二四年パリ大留学、二八年モスクワ入りし片山潜秘書、三〇年根本辰事件で検挙・強制収容所（ラーゲリ生活）、三四年刑期短縮・帰国、陸軍・東方社、戦後故郷信州南木曾で実業家（『赤露脱出記』日本評論社、三四年、『凍土地帯』吾妻書房、七七年）

衣笠貞之助（一八九六—一九八二、俳優藤沢守）二八年八月—三〇年五月在独、当時映画監督・俳優・衣笠映画、二八年「十字路」上映、三二年「忠臣蔵」、五三年「地獄門」でカンヌ映画祭グランプリ（『わが映画の青春』中公新書、七七年）

岡田 桑三（一九〇三—八三、俳優山内光）二一—二四年独留学、二九年夏訪独、当時映画俳優・プロキノ映画、四一年東方社理事長、満映、戦後科学映画製作、六一年菊池寛賞・六四年朝日賞（川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀』平凡社、二〇〇二年）

新明正道のコルシュ、タールハイマー研究会

第二に、新明正道らの研究会は、この「ベルリン社会科学研究会」に対抗し、それが実践的・政治的な「ベル

リン反帝グループ」へと転化する端境期に、ドイツ共産党系運動に距離をおき、カール・コルシュやアウグスト・タールハイマーを囲む読書会を開いていた。そのメンバーは以下の通りである。

新明 正道（一八九八—一九八四）二九年四月—三一年四月在独、当時東北大助教授（社会学）、旧制四高・東大卒、新人会出身、三一—六一年東北大教授、戦時大日本言論報国会、戦後学士院会員（『ワイマールドイツの回想』恒星社厚生閣、八四年、『ドイツ留学日記』時潮社、九七年）

杉本 栄一（一九〇一—五二）二九年五月—三二年三月在独、当時東京商科大助教授（経済原論）、東商大卒・福田徳三ゼミ、三二—五二年東商大・一橋大教授

服部英太郎（一八九九—一九六五）三〇年四月—三二年三月在独、当時東北大助教授（社会政策）、旧制三高・東大卒・新人会、三五年東北大教授、四二年検挙、四六年復職、六二年福島大学長（「大学生活四十年—服部教授に聞く」東北大学研究年報『経済学』六六・六七号、一九六三年）

小畑 茂夫（？—一九三三）三〇年四月—三二年？在独、当時大倉高商教授、東商大卒・高垣寅次郎ゼミ（貨幣論）

大熊 信行（一八九三—一九七七）三〇年七月—三一年九月在独、当時高岡高商教授（経済学）、東商大卒・福田徳三ゼミ、戦時大日本言論報国会、五二年神奈川大・創価大教授（『ある経済学者の死生観』論創社、九三年）

ベルリン反帝グループ

第三は、ベルリン社会科学研究会参加者であった国崎定洞・千田是也らに、二九年頃からベルリンに入る小林陽之助・勝本清一郎・藤森成吉らが加わって、反戦反ファシズムの実践活動を始めた在独左翼グループである。

その中核には、国崎定洞を責任者とするドイツ共産党日本人部があった。政治的には、モスクワの片山潜・勝野金政、日本の経済学者河上肇、共産党指導部岩田義道らとつながり、コミンテルン（共産主義インターナショナル）のいわゆる「三二年テーゼ」は、平野義太郎・堀江邑一・小宮義孝・河上左京らを介して、このルートで日本に送られた。

その周辺には、ナップ[全日本無産者芸術団体協議会]ベルリン支部、プロレタリア科学研究所ベルリン支部、革命的アジア人協会などを組織し、国際反帝同盟、国際赤色救援会（モップル）、国際労働者救援会、文学・演劇・美術・建築・写真などの左翼国際組織と連絡していた。

「ベルリン在住日本人左翼グループ」「ドイツ共産党日本人部（エル・ゲーLanguage Group）」「在独日本人革命家グループ」などさまざまな名前で、関係者の回想や特高外事警察の記録にでてくるが、ベルリンに本部をおく国際反帝同盟のよびかけに応えた反戦反ファシヨ闘争が活動の中心であったので、ここでは「ベルリン反帝グループ」とよんでおく。

国崎 定洞（ベルリン社会科学研究会、別名アレクサンダー・コン）二八年七月ドイツ共産党（KPD）入党、二九夏反帝同盟フランクフルト大会出席、二九年末ドイツ共産党日本人部結成。三一年三月ベルリン反ファシヨ大会日本代表、三二年一月—三三年三月「革命的アジア人協会」組織、三二年夏アムステルダム国際反戦大会日本代表、そのままモスクワ亡命、三七年八月「日本のスパイ」として逮捕され一二月一〇日銃殺（加藤哲郎『モスクワで粛清された日本人』青木書店、九四年、加藤『国境を越えるユートピア』平凡社、二〇〇二年）

千田 是也（ベルリン社会科学研究会）二七・二九年国際反帝同盟評議会出席、二九年七月ドイツ共産党入党、ATBT（ドイツ労働者演劇同盟）・IATB（国際労働者演劇同盟）日本代表

岡内 順三（ベルリン社会科学研究会）三〇年ドイツ共産党入党

三宅鹿之助（一八九九—一九八二年）二九年二月—三一年四月独仏英米留学、当時京城帝大助教授（財政学）、東大経卒（山田盛太郎・岩田義道同窓）、三二年教授、三四年五月京城大赤化事件で逮捕・三七年辞任、戦後東洋大・龍谷大・東北学院大教授（「ベルリン生活の思い出」『経済』七二年五月）

白井 晟一（一九〇五—八三）二八年四月—三二年在独、当時ベルリン大学学生・『伯林週報』編集、京都高等工芸卒、三三年モスクワ滞在、シベリア鉄道經由帰国、建築家（三一年春パリで林芙美子の恋人S氏、『建築文化特集 白井晟一』八五年二月、今川英子編著『林芙美子 巴里の恋』中央公論新社、二〇〇〇年）

川村金一郎（一九〇八—九九）二九年四月—三一年一〇月在独、当時ベルリン大学生（映画研究、鈴木東民同郷後輩）、帰国後プロキノ運動検挙、東京日々・毎日新聞外信部、戦後岩手日報政治部長・盛岡文化懇談会、共産党地区委員長・レッドページで家業の洋品店経営、盛岡商工会議所、岩手大独語講師（『川村金一郎小文集』非売品、九五年）

小林陽之助（一九〇八—四二、別名コバ）二九年九月—三三年二月在独、当時ベルリン工科大留学生、旧制二高中退（河上肇高弟の小林輝次甥）、三〇年ドイツ共産党入党、ハンブルグの海員組合で活動、三三年モスクワ亡命、三三—三五年クートベ在学、三五年コミンテルン第七回大会日本青年代表、三六年七月帰国地下活動、三七年一二月逮捕・獄中死（「小林陽之助聴取書」三八年、林虎雄『野坂陰謀を暴く』道理社、五〇年）

勝本清一郎（一八九九—一九六七）二九年一〇月—三三年一二月在独、当時文芸評論家・三〇年一月ハリコフ世界革命作家同盟大会日本代表、慶応大院卒、三田文学同人、三五年日本ペンクラブ初代主事、三八年大岩誠事件で検挙、五一年日本ユネスコ協会連盟理事長（『赤色戦線を行く』新潮社、三〇年、『前衛の文学』新潮社、三〇年、『こころの遠近』朝日新聞社、六五年、『近代文学ノート』全四巻、みすず書房、七九・八〇年）

島崎 蓼助（一九〇八—九二）二九年一〇月—三二年末 在独、プロレタリア美術、明治学院・川端画学校卒、島崎藤村三男、『嵐』三郎のモデル、勝本に同行、画家（「在独日本青年素描」『改造』三六年二月、加藤哲郎・島崎爽助編『島崎蓼助自伝』平凡社、二〇〇二年）

根本 辰（一九〇四—三八）三〇年一月—九年在独、当時哲学研究でモスクワに行くが山本懸蔵にスパイと疑われ逮捕・国外追放、勝野金政粛清の原因となる、京大文卒、無産者新聞編集部、帰国後地方行政学会（音楽評論家山根銀二の義兄、M・ウェーバー『音楽社会学』を山根と翻訳）

藤森 成吉（一八九二—一九七七）三〇年一月—三二年五月在欧米（信子夫人同行）、当時日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）委員長・三〇年一月ハリコフ世界革命作家同盟大会日本代表、東大卒、文芸戦線、三二年ソヴェート友の会、四九年日本共産党入党、七二年日本国民救援会会長（「転換時代」『改造』三一年一〇月、『藤森成吉全集』全一卷、改造社、三二年、『ヨーロッパ印象記』大畑書店、三四年、藤森岳夫『たぎつ瀬』八六年）

服部英太郎（新明正道研究会）

井上角太郎（一九〇〇—六七）三一年一月—三三年一〇月在独、当時ベルリン大留学生（経済学）・在独日本商務官事務所助手、北海道出身・京大経済学部卒、三三年ロンドン、三九年アメリカ渡航、日米民主委員会、『紐育時事』『北米新報』編集、戦後占領期朝日新聞ニューヨーク通信員、晩年はスイス在住

山口 文象（一九〇二—七八、別名岡村蚊象）三〇年一二月—三二年六月在独、当時ベルリン工科大学生・建築家・ドイツ社会主義建築同盟加盟、東京高工付卒、創宇社、グロピウス事務所、五三年R I A建築総合研究所（『山口文象 人と作品』相模書房、八二年）

山西 英一（一八九九—一九八四）三一年二—四月訪独、広島高師講師・文学研究者、三五年までイギリス留学、三八—五〇年成蹊高講師、戦後トロツキー・ドイッチャー翻訳者（「ファシズム把権の前夜」『運動史研究』一五号）

和井田一雄（一九一一—五八、別名南）三一年六月—三三年初在独、当時ベルリン大留学生（哲学）、旧制一高・東大卒、三三—三六年パリ大留学（独仏文学）、三八—四六年外務省情報部（作家中村光夫と同級生）、四九年東京理大助教授

喜多村 浩（一九〇九—二〇〇二、別名西村）三一年夏—三三年七月在独、当時ベルリン大留学生（経済学）、旧制一高中退・有澤廣巳紹介で渡独、三三年バーゼル大、三九—四八年読売新聞ローマ特派員、四八年帰国、四九年都立大教授、五七年国連エカフェ日本代表、七一年青山学院大・国際キリスト教大・国際大学教授

安達鶴太郎（一九〇六—八九）三一夏—三九年三月在独、当時ベルリン大留学生・三六年同盟通信ベルリン支局長、旧制一高・東大卒・新人会出身、戦後時事通信政治部長・編集局長

嬉野満洲雄（一九〇七—九三）三一年六月—三三年三月ベルリン大留学生、東大在学中検挙中退、三三年読売新聞、三六年中国支局・三九年ベルリン特派員・欧州局長、戦後読売新聞論説委員、ボーン賞受賞（『勝利を惧れる』共立書房、四六年、「私の見たナチス・ドイツ」『反共主義 歴史の教訓』日本共産党出版局、七五年）

八木 誠三（一九〇九—八一、別名石村）三一年夏—三四年在独、当時ベルリン大留学生（経済学）、有澤廣巳紹介で渡独、四一年小栗喬太郎事件検挙、戦後名古屋丸栄百貨店・日本電装取締役

小栗喬太郎（一九〇六—六七、別名小川）三一年七月—三三年二月在独、当時プロレタリア・スポーツ研究、半田中卒（作家小栗風葉甥）、三二年六月ドイツ共産党入党・労働者スポーツ担当、三三年ソヴェート友の会、四〇年検挙、四五年日本共産党入党・平和運動に従事（佐藤明夫編『ある自由人の生涯』六八年、小中陽太郎『青春の夢』平原社、九八年）

岡部 福造（一九〇三—三五）三一年六月—三三年三月在独、当時山形高校教授（独文学）東大独文卒、二六—三三年山形高教授（「山高文化運動の父」）、帰国後結核死

小林 義雄（一九〇九—一九五）三一年八月—三二年六月在独、当時ベルリン大学留学生（経済学）、旧制三高・東大卒・有澤廣巳ゼミ、東京商工会議所、三八年東亜研究所・大岩誠事件検挙、四九年専修大・六六年國學院大学教授（『小林義雄教授古希記念論集』西田書房、八三年）

佐野 碩（一九〇五—一九六六）三一年九月—三二年一〇月在独、演出家、浦和高・東大卒・新人会出身、三三年モスクワ亡命・メイエルホルド師事、三七年ソ連国外追放、パリ・米国經由三九年メキシコ亡命・演劇活動（後藤新平孫・佐野学甥、「メキシコ演劇の父」、藤田富士男『ビバ・テアトロ』オリジン、八九年）

三枝 博音（一八九二—一九六三）三一年一〇月—三二年三月在独、当時成蹊高講師・哲学者、旧制五高・東大卒、三二年唯物論研究会、三三年検挙、四六年明大・鎌倉アカデミア、五二年横浜市大教授、六一年横浜市大学長（飯田賢一『回想の三枝博音』こぶし書房、九六年、『三枝博音著作集』中央公論社、七二—七三年）

野村 平爾（一九〇二—一九七九、別名東条）三二年二月—三三年一〇月在独、当時早大法助手（労働法）、早大卒、ニューヨーク、パリ・ガスプ經由ベルリンへ、三八年大岩誠事件検挙、四〇年早大教授、戦後日本学術会議副会長（『民主主義法学に生きて』日本評論社、七六年、『野村平爾著作集』全五巻、労働旬報社、七八年）

大野 俊一（一九〇三—一九八〇）三二年五月—三三年一〇月在独、当時ベルリン大学留学生（独仏文学研究）、東大独文卒、パリ・ガスプを経て訪独、三六年外務省・四一年情報局嘱託、五四年日本ユネスコ連盟協会（勝本の補佐）、五七—七〇年慶大・七〇—七三年武蔵大教授（石田英一郎・竹山道雄友人）

大岩 誠（一九〇〇—一九五七、別名三田）三二年六—七訪独、当時京大助教授（政治思想）、京大卒、パリ大留学・ガスプ結成・マルセイユ海員組合で活動、三三年滝川事件辞任・立命館大教授・『世界文化』同人、三八年小林陽之助幫助で逮捕・供述・転向、五一年南山大教授（『新社会設計図』甲文堂、三六年、「大岩誠調書」三八年）

千足 高保（一九一〇—一九八〇）三二年五月—四五年末在独、当時ベルリン大留学生（哲学）、東京外語露語科卒、ベルリン日本人学生会代表、四二年ベルリン大講師、四三年在独日本大使館、四五年帰国・東京裁判通訳、五六年防衛大・五九年東女大教授（『ドイツに学ぶ』美和書房、四九年）

鳥居 敏文（一九〇八—存命）三二年七月—三三年二月在独、当時プロレタリア美術運動・画家、村上中・東京外語卒、三三年三月—三五年四月パリ、独立美術協会（林武師事、宇佐見承『池袋モンパルナス』集英社、九〇年）

竹谷富士雄（一九〇八—一九八四）三二年七月—三三年二月在独、当時プロレタリア美術運動・画家、村上中・法政経卒、三三年三月—三五年四月パリ、新制作派協会、再渡仏（『パリの陽だまりから』芸立、七八年）

土方 興志（一八九八—一九五九）三三年五月パリからベルリン經由モスクワ亡命（梅子夫人同行）、二二—二三年独留学、築地小劇場創設・演出家、三三年モスクワ亡命・爵位剥奪、三七年国外追放でパリ經由四一年帰国逮捕、新演劇人協会（『演出者の道』未来社、六九年、『土方梅子自伝』早川書房、七六年、尾崎宏次・茨木憲『土方与志 ある先駆者の生涯』筑摩書房、六一年）

二宮 秀（一九〇〇—一九七一）三二—三三年在独、当時音楽研究・鳥居敏文らと活動、神戸の医者の子、パリ經由で帰国後、宝塚歌劇団音楽監督（川崎賢子『宝塚というユートピア』岩波新書、二〇〇五年）

パリ・ガスプ[芸術科学友の会]グループ

第四は、ベルリン反帝グループと主要なメンバーが重なり、政治的にも人的にも密接な連絡を保っていた、パリ在住のグループである。パリの反帝グループは、一九三二年一月には「ガスプ（GAASP）」を結成し、学習会など組織活動を行っていた。「ガスプ」とは、パリ及びベルリンでの中心メンバーの一人であった野村平爾（後の早稲田大学教授、労働法）によれば、「在巴里芸術科学友の会」の略称であった（『民主主義法学に生きて』日本評論社、一九七六年）。パリという場所から若手画家が多く、戦中・戦後の日本美術界にもそのネットワークを残している。

大岩 誠（ベルリン反帝グループ） 三〇年五月—三三年一月パリ大学、マルセイユで日本人船員向け反戦活動、三二年一月ガスプ結成

嬉野満洲雄（ベルリン反帝グループ） 三〇年六月—三一年六月パリ大学

野村 平爾（ベルリン反帝グループ） 三一年八月—三二年二月パリ大学、三二年一月ガスプ結成

佐野 碩（ベルリン反帝グループ） 三二年一月パリ訪問・ガスプ結成

和井田一雄（ベルリン反帝グループ） 三二年三月パリ訪問

坂倉 準三（一九〇一—一九六九）二九年八月—三六年四月在仏、当時建築家（コルビュジェ師事、山口友人

友人)、東大美学卒、三二年一月ガスパ結成、三七年パリ万博日本館当選、四〇年坂倉建築研究所(『大きな声』鹿島出版会、七五年)

吉井 淳二 (一九〇四—二〇〇四) 二九年十一月—三二年在仏、当時画家、美校卒、三二年一月ガスパ結成、四〇年二科会、七八年二科会理事長、七六年芸術院会員、八九年文化勲章受賞(『画ちょうの葉』南日本新聞社、九八年)

平田 文夫 (一八九八—一九六八) 三〇年五月—三二年三月在仏、当時桐生高工教授、旧制三高・東大理卒(膠質化学)、三二年一月ガスパ結成、三二年三—九月スウェーデン・米国留学、三七年理学博士、四五年桐生工専校長、四九—五二年群馬大工学部長

内田 巖 (一九〇〇—五三) 三〇年九月—三二年四月在仏、当時洋画家(作家内田魯庵長男)、三二年一月ガスパ結成、美校卒、光風会、三六年新制作派協会、四六年日本美術会、四八年日本共産党入党(風間『憂鬱な風景』影書房、八三年)

田中 忠雄 (一九〇三—九五) 三〇年九月—三二年一〇在仏、洋画家(宗教画)、三二年一月ガスパ結成、京都高等工芸卒、二科会、四六年行動美術協会、八五年毎日文化賞、武蔵野美大教授(『求美の使徒 田中忠雄展』北海道立近代美術館、一九八四年)

佐藤 敬 (一九〇六—七八) 三〇年一〇月—三四年六月在仏、洋画家(歌手佐藤美子夫)、美校卒、プロキノ・ナップ参加、三六年新制作派協会、五二年再渡仏(『遙かなる時間の抽象』大分、七九年)

富永 惣一 (一九〇二—八〇) 三一—三三在仏、当時美術評論家、東大美学卒、宮内庁研究員(西洋美術批評)、五九—六八年国立西洋美術館長、六八年共立女子大教授(坂倉と同級生)

鳥居 敏文 (ベルリン反帝グループ) 三三年三月—三五年四月在パリ

竹谷富士雄 (ベルリン反帝グループ) 三三年三月—三五年四月在パリ

土方 與志 (ベルリン反帝グループ) 三三年春在パリ

ねずまさし (一九〇八—八六) 三三年四—七月訪仏、当時京大助手(考古学・歴史学)、京大史学卒、歴史学者(岡田桑三友人)、『世界文化』同人、三七年小林陽之助幫助・大岩誠事件検挙(『現代史の断面』校倉書房、九〇—九七年、「プチブルの同人雑誌『世界文化』』『思想』七六年一月)

大野 俊一 (ベルリン反帝グループ) 三三年一〇月—三五年三月在仏、『太陽のない町』仏訳

革命的アジア人協会のアジア人

第五は、国崎定洞らベルリン反帝グループと、周恩来のつくった在欧中国人反帝同盟が、ベルリンに本部をおく国際反帝同盟を介してつながった「革命的アジア人協会」の関係者である。日本人と一緒に活動したことがこれまで判明している「革命的アジア人協会」に関わった中国人、朝鮮人、インド人を挙げておく。廖承志・王炳南らは、戦後中国革命を経て、日中文化交流に重要な役割を果たす。

章 文晋 (一九一四—九一) 二七年—三一年在独、当時留学生、モスクワ孫中山大卒、三八年中国共産党入党、七八中国外務次官、八三駐米大使、八六—八八年対外友好協会会長

廖 承志 (一九〇八—八三) 二八年十一月—三二年初在独、当時ベルリン大学留学生・在欧中国人海員組合指導者、東京生まれ・早稲田大学中退、二八年中国共産党入党、三四年長征参加、五六年中国共産党中央委員、六四年から中日友好協会会長(『廖承志文集』上下、徳間書店、九三年)

成 仞吾 (一八九七—一九八四) 二八年—三一年九月在独、プロレタリア文学作家、東大卒、創造社、三四年長征参加、中国人民大学学長

王 炳南 (一九一〇—八八) 三一年—三六年二月在独、当時ベルリン大学生、陝西省出身で二五年中国共産党入党、日本の上智大留学を経てドイツに留学、三五年ドイツ人女性アンナと結婚、西安・延安を経て重慶で周恩来の助手、五五年駐ポーランド大使、中国外務次官、対外友好協会会長(王安ナ『革命中国に嫁いで』平凡社、七五年、『中米会談をめぐる王炳南回顧録』同時代社、八六年)

李 康国 (一九〇五—五六) 三二年五月—三五年一―一月在独、当時ベルリン大留学生(京城大助手)、京城大法卒、三〇年助手(三宅鹿之助門下)、帰国後三八年八月検挙、朝鮮人民民主主義共和国初代民主主義民族戦線事務局長、五六年朴憲永派として金日成により粛清される

ヴィレンドラナート・チャットパディア (Virendranath Chattopadhyaya, 一八八〇—一九三七) 一四—三三在独、当時国際反帝同盟本部書記、オックスフォード大卒、インドの名家出身の独立運動家、ネルー友人、アグネス・スメドレーの夫、ドイツ共産党員、三三年モスクワ亡命、三七年レニングラード大学教授時に突然逮捕・粛清される(Nirode K. Barooah, *Chatto: The Life and Times of an Indian Anti-Imperialist in Europe*, Oxford UP, 2004; Sobhanlal Datta Gupta, *Commintern and the Destiny of Communism in India 1919-1943*, Seribaan, Kolkata 2007)